



1950年代アメリカのテレビに描かれた労働者：テレビ番組「ハネムーンーズ」を中心に

| | |
|----------|--|
| 著者 | 佐藤 正晴 |
| 雑誌名 | 明治学院大学社会学・社会福祉学研究 = The Meiji Gakuin sociology and social welfare review |
| 巻 | 133 |
| ページ | 171-182 |
| 発行年 | 2010-03 |
| その他のタイトル | The Honeymooners : How the Blue Collar Worker Was Depicted in 1950s American TV Programs |
| URL | http://hdl.handle.net/10723/63 |

【研究ノート】

1950年代アメリカのテレビに描かれた労働者

——テレビ番組「ハネムーナーズ」を中心に——

佐藤正晴

はじめに

小論を展開するにあたって、簡単にアメリカの時代背景をたどっておきたい。アメリカでテレビの商業放送が開始されたのは、1941年7月のことである。だが、同年12月に戦争に突入したため、実質的な放送開始は1945年といえる。

1950年に朝鮮戦争が勃発すると、FCC（連邦通信委員会）は新設テレビ局への放送免許発行を1952年まで凍結した。1952年以降、アメリカではテレビ放送が本格化する。

1950年代中頃に到来した本格的な大衆消費社会によって、「新中流階級」が出現する。彼らは、ブルーカラー労働者であっても、経済成長による賃金の上昇や郊外住宅地の持ち家の所有によって中流階級的な意識をもつようになる〔吉原2006：71〕。

彼らの必需品の盛り込まれたテレビは、1950年代を通じて郊外の中流階級家庭を放送すると同時に、本稿で取り上げる「ハネムーナーズ」のように中流階級を切望する労働者階級の家庭の姿を放送した〔Ella1989:25〕。

本稿では、同時代的には日本人にあまり知られることがなかった「ハネムーナーズ」の支配的な男性キャラクターと彼のどじな仲間との友情について小論を展開したい。この小論を通じて、労働者階級の核家族を描いたシットコムが

ネットワークテレビの中心になっていく姿の一端を描き出せればと考えている。

1 「ハネムーンナース」の概要

アメリカの人気ホームコメディ「ハネムーンナース」は1951年にデュモント・ネットワークの「カバルケイド オブ スターズ」の一部として放送開始された。1952年から1955年にかけて「ジャッキー・グリーンソン・ショー」の中の1シリーズとして放送されて、1955年から1956年にかけては、CBSの30分番組として放送された。シリーズの散発的な復活は、1971年まで続いた^①。

ジャッキー・グリーンソン(1916-87)は、俳優・コメディアンであり、1949年から1954年に「ハネムーンナース」の主人公役を演じた^②。

「ハネムーンナース」は人生の気骨さを描くことによって新しい分野を開拓しようとしたとされている。ブルックリンのアパートに住む住人たちクラムデンやノートンは、1950年代の大半のシリーズで描かれた幸福な中流階級の家族とはかけ離れていた。グリーンソンが1966年に新しいキャストで「ハネムーンナース」をリバイバルさせた際、オリジナルの1950年代のエピソードのうちわずかに39話だけが映像化された。この映像化は現在、「古典的なテレビコメディ」として多くの研究者に考察されているが、放送初期の不人気は、1950年代のいわゆる家族娯楽における「現実」を直視させられたことへのアメリカ人の嫌悪感を現している [Cheryl2000:27]。

クラムデンとノートンの手軽に金持ちになる計画を思いめぐらす筋書きは、必ず失敗した。この番組は、言葉の機転と滑稽な言葉の誤用と明るい体育会系のコメディを器用に混ぜ合わせていた。そして、生放送の観客の前で演じられた細かい設定は、ほとんど変わることがなかった。わずかな家具しかない部屋にはドレッサー、いたんだテーブル、古い冷蔵庫がいつも置かれていた。荒れたアパートとクラムデンのくだらない計画が、経済的保障に高まるアメリカの

地獄の光景を現した。この番組の形式は、ほとんどが楽天的なコメディではない。だが、テレビ史上2番目に高い視聴率を記録したのだ。

労働者階級の周辺を描いた「ハネムーンナース」ではあるが、親しい仲間クラムデンとノートンは卑しい環境における友情の豊かさを示していた [Lynn1992:129]。

「ハネムーンナース」のような家族コメディは、テレビの公開番組ショーやバラエティ、コマーシャルを演じたキャラクターを描いた [Lynn1992:160]。「クラムデン・アパート」は、スターが視聴者に才能を披露する劇場的な場所に変わったのである [Lynn1992:171]。

2 「ハネムーンナース」のキャスト

「ハネムーンナース」は4人のキャラクターを中心に進んでいく。ニューヨーク市のバスの運転手ラルフ・クラムデン（ジャッキー・グリーンソンが演じた）と妻のアリス（オードリー・メドースが演じた）、そして同じアパートに住むラルフの親友エド・ノートン（アート・カーニーが演じた）とトリクシー・ノートン（ジョイス・ランドルフが演じた）が質素な部屋で生み出す笑いとペースのドラマであった。

ラルフ・クラムデンは、アメリカンドリームにおける実直な努力や忍耐をまとうことを好まなかった。そして、けっして根拠の無い大きなアイデアを抱かなかった。短絡的な事業家は、経済的な独立の近道をとるが、クラムデンはいざこざに関わらない知識や内職を優先的に求めた。

そしてクラムデンは、自分の持って生まれた運勢についていつも愚痴った。その一方で、彼の親友のノートンは、運命に左右されること無く、自身を「さえない労働者」とみなしながらも、働くことの尊さを心底信じていた [Mary2008:132]。

「ツーツー ショーツ アンド リンディズ」でジャッキー・グリーンソンが大酒を飲むために金を自由に費やしていたことは、1940年代の彼についてほとんど何も知らない人たちを驚かせた [Robert1975:193-194]。

彼はかつて、会社を維持するためにオーケストラに雇われた。演芸業のハンディキャップをもつ人たちは、頭をゆらすグリーンソンの悪ふざけに悪のりをしていて、ブロードウェイのお気に入りのキャラクターの模倣をナイトクラブで行うだけで、大衆に訴えかけるものはほとんどなかった。

グリーンソンがテレビシリーズ「ライフ オブ ライリー」を降板したとき、ウィリアム・ベンディクスが引き継いだ。グリーンソンはベンディクスがより大役を演じることできることを知った。このシリーズはチャップリン、アボット・アンド・コステロ、そしてローレル・アンド・ハーディの思想に重きをおくグリーンソンに期待されたものであった。そしてアイデアが「ビッグ パレード オブ コメディ」のためにデュモント・ネットワークに売られるまでに多くの歳月を要した。

グリーンソンは成功した。そしてすぐにNBCの「ミルティーバールおじさん」の役をつかむのは早かったので、まさに「ミスターテレビ」であるとみなされた。

毎週ショーはジューン・テイラー・ダンサーズとともに開催された。それからグリーンソンはタバコくさいジャケットを着てステージに上がった。そして「レイト-レイト-レイト-ショー」, 「フィーチャリング エバー ポピュラー メイ ブッシュ」の要約をはじめとした独り言を言って、「マザー フレッシュャーズ パサタズール」のコマーシャルによって中断された際には、グリーンソンはテレビ劇場の袖に自分の肥満体を向けた。グリーンソンが「エンド アウェイ ウィー ゴー」と食事を取るとき、彼の手は垂直に脂肪を押し付けたのである。

グリーンソンのキャラクターは「プア ソウル」におけるサイレントコメディ

の活躍から続いていた。コーヒーの自動販売機に嘆くどうしようもない人、おしゃべりなやくざバーテンダーは、アドバイスをしたりしたのだ。

グリーンソンのもっとも人気のあった役柄は、いつもすばやい金儲けの計画をもって現れるバスの運転手ラルフ・クラムデンだった。彼は皮肉屋だが愛する妻アリスは辛抱し彼のために貯蓄をしていた。アリスの皮肉は「ハネムーンナーズ」のこのエピソードによく描かれていた [Robert1975:194]。

アート・カーニーはブルックリン・ブロンクスの裁縫職人で2階の住人エド・ノートンとして引き立て役を演じた。彼はよくリハーサルの間中、この役をはじめ自分でアドリブの台詞を言った。そして最後にはそのアドリブが脚本になったという。

「ジャッキー・グリーンソン・ショー」の中でも特に「ハネムーンナーズ」は、「即興」によるヒットだった。そしてグリーンソンはいつも成功への金の利用の仕方を知っていた。彼は、15年間1年ごとに100,000ドルの保証金、プラス2年でショーの7,000,000ドルの委託を求めるCBSとの契約を交渉していた。

グリーンソンはもし契約を結ぶことができなければ、続けるつもりはないと空威張りをしていたという。グリーンソンはどのような状況においてもこの種の契約に長けており、昼食交渉の間中、居眠りをしていたこともあったという。

グリーンソンの才能のひとつは、彼自身が相手をしなければならない誰かについて利用する能力だった。彼は人間性で人を操った。ピークスキル、ニューヨークそして引っ越してすぐに地元の有力者に豪華なパーティに招待されたことも多かったという。

CBSのある法律家によるとグリーンソンは「実に注意深い人」だったと同時に、人々の笑わせ方を知っていたという。1970年にグリーンソンとCBSは興行したいショーの種類について仲違いをした。CBSは「ハネムーンナーズ」のフルタイムをやりたかった。1950年代半ばの1年間にジャッキーは30分のショーを別な番組として行ったが、彼自身は「ハネムーンナーズ」を含むバラエティ・

パッケージを好んだ。

グリーソンは、CBSの提案にいくつかの示唆を与えた。しかしそれは4日で55分の脚本、幕の長さなどいたい同じくらいの会話を覚えることを意味していたといわれていた [Robert1975:195-196]。

結局、グリーソンは最後まで納得しなかった。そしてフロリダのインベラリーの新しい家に引退していった。いたるところに大きなダンスクラブがあるようなCBSは、自局の能力の維持に反対する勢力の排除を決定したのである。その後もCBSはグリーソンへの契約として、年間100,000ドルの支払いを希望し続けた。

たとえCBSと仲違いをしてもグリーソンは、欠かすことのできないパフォーマーの一人だった。彼はいつでも、ショービジネスの世界に戻ってこられると信じていた。彼は1,000エーカーの宅地とフォート＝ローダーデールの近くの娯楽の複合体インベラリーで家庭としての喜びを楽しんだ。より実践的なグリーソン・デザインの高価なプレイルームは、2ベッドルームの家とプールにテーブルとオルガンで6フィートものサイズがあった。グリーソンは堂々とジェスチャーをしながら「ジョー・ミラーのジョークは悪くない」と皮肉を言う。リラックスできて広々として彼はプレイルームの隅に陣取ってバーから酒を飲んだ。そのバーは椅子からひじを伸ばすのに十分な高さだった。そこはバーテンダーを見下ろすことができる世界でまれな場所に違いない。家の前に止められたゴルフカートは毎朝インベラリーの3つのゴルフコースのひとつに運ばれた。彼のナンバーワンのゴルフカートはそのリンクに止められていて、エンジンを点け、ステレオラジオのスイッチを入れた。

グリーソンはけっしてアルコールを飲む際の軽食を遠ざけなかった。各部屋にバーがあり、それらのいくつかがボタンに触れればトースターからパンが出てくるようになっていた。彼はかつてデヴィッド・サスカインドに飲む理由を聞かせた。「私？私は酔っ払うために飲む」といつも答えていたという。

結果として、グリーンソンは年に100,000ドルの支払いを最後にCBSと再契約をしなかった。「ハネムーンナーズ」の1時間よりも彼の好みは、テレビ局を飛び越えNBCとの合意にいたった。彼の経歴の大方は無視されての合意であった。CBSが以前と同様にグリーンソンのバラエティ番組の形式について権利をもった。CBSの古い番組形式に合わせたグリーンソンは、疲れたように見えたという [Robert1975:197]。ブルックリンのピリヤードボールに酔ったとき、彼は「私には戻る気がない。そこは汚くうるさくて喧嘩ばかりだ」とため息をついたという [Robert1975:198]。

「ハネムーンナーズ」で演じられたラルフとアリスの夫婦は、新婚ではあったけれど、子供のいない中流生活者の印象を与えた。これは、同じアメリカのテレビ番組「アイ・ラブ・ルーシー」のようにただただ幸せなカップルを描いた作品とは別な対象の番組として提供されたといわれる理由のひとつであろうと考えられる [Super 2005:439]。

3 「ハネムーンナーズ」の衝撃

「ハネムーンナーズ」は、わずか30分番組として放送を開始されたけれども、その先数十年のテレビのシットコムにおいて継続される番組形式を作った。グリーンソンは、1950年代にバラエティ・ショーにおいてラルフ・クラムデンの笑いを再現した。1985年にグリーンソンは、通常の放送では、いまだかつて観たことがない新しいエピソードを発表した。

放送開始から50周年の記念の年であった2005年にはアメリカのテレビ界においてももっとも思い出深く共感したコメディの一つとして選ばれた。1955年から1956年といった放送開始時からの「ハネムーンナーズ」の視聴者は、すでにクラムデンやノートン家の隣人たちを知っていた。グリーンソンのオリジナルライター、ジョー・ビッグローとハリー・クレーンは非現実的で奇抜なスケッチを

欲しかったが、グリーンソンはラルフの大騒ぎこそがよかったことを知っていた。初期の通常の番組は、簡素な現実に基づいていた。グリーンソンは彼のライターたちに「人々が現実生活している」ように作るよう教育した。そしてグリーンソンの少年時代に住んでいた「358 Chauncey Street」の話のキャラクターをコメディアンに演じさせた。グリーンソンのために長年ジョークを書いていた作家のスナッグ・ウォリスは、1951年10月5日こそが、ラルフ・クラムデンの誕生日として見られるべきであるという。この時点で、「ハネムーンズ」の世界はまさにはっきりと現れていたのである [Ron2005:59-60]。

1年後、CBSのウィリアム・パレイは精彩のないデュモント・ネットワークのグリーンソンと彼のスタッフをCBSへ勧誘した。グリーンソンには土曜日の夜に金がかかるとされる生放送1週制作費としてより多額予算を与えられた。これを機にグリーンソンは彼のバラエティ・シリーズで多くの記憶に残るキャラクターを作った。しかし視聴者はクラムデン一家以上のものを欲しかった。最初の3年の間で、「ハネムーンズ」は10分番組から40分以上の番組に成長を遂げた。

1955年にビュイック・モーター・カンパニーが主人公のグリーンソンに600ドルで2年間かけて週1回の連続ホームコメディとして「ハネムーンズ」を製作したいと申し出た。結局「ハネムーンズ」の新バージョンは1,100人の視聴者の前で週に2回放送された。最初のシーズンの中で、グリーンソンはすべてをリハーサルの時間に捧げた。そして製作されたエピソードには、ライブスケッチとしての自発性と独創性が欠けていると感じられた。グリーンソンはまた自分のショーを「反・グリーンソン」として描きかねない新人歌手の登場でもって視聴率と結びつけられることに神経質だった。39話以降のエピソードはバラエティ形式の生放送に戻すことになった。

1950年代のテレビにおける労働者階級のコメディとされる「ハネムーンズ」で描かれた世界は都市の隅っこにすぎなかった [Ron2005:61]。

1955年まで、典型的な労働者の家族はブロンクスからハーバービル郊外へ引っ越した。最初にフィルム化されたエピソードは、1955年10月1日放送分で、ノートン家とクラムデン家はテレビセットを所有するための費用について話し合った。「ハネムーンズ」にみられるコメディの多くはラルフとすぐにだまされやすいエドを別々の企みでもって、すぐに金持ちになろうとするカップルの周囲で展開した。貧困から逃げたいという切望はグリーンソン自身の青春期の夢を反映していたのかもしれない。グリーンソンはもしこの労働者階級コメディで笑えなければ、「笑えるコメディはない」とまで考えていた。「ハネムーンズ」についてのスケッチは、特別な真実の素材に取り組もうとするライターとともにグリーンソンの忘れられないテレビシリーズとして多くの視聴者の記憶に残っていった。1956年から1957年の「ジャッキー・グリーンソン・ショー」のシーズンの間中、クラムデン家とノートン家はたくさんのミュージカルナンバーを引き上げてヨーロッパ旅行中だった。シリーズを終えるとグリーンソンは彼の1960年代の代表的なコメディ「アメリカン シーン マガジン」まで「ハネムーンズ」のスケッチを復活させなかった。グリーンソンは新キャストのメンバーを擁して、そのスケッチを復活させたのであった [Ron 2005: 62]。依然としてラルフ・クラムデンと妻のアリスの人気は不動のものであった。その理由としては、低階級の黒人と白人について放送した「ハネムーンズ」の39のエピソードは、テレビの地方局においてまぎれもなく成功そのものだったからである。

しかし「ハネムーンズ」の作品のほとんどは偶発的に生じたと考えられている。なぜ「ハネムーンズ」は「フラフープ」や「デビット クロケット キャップ」といったほかの1950年代のテレビ番組のようにゴミ箱に分類されることなく21世紀の現在までいまだに語りつがれるのだろうか。テレビの歴史に残るほどこの番組は多くの視聴者にみられたわけではない。2005年初頭の「ハネムーンズ」の「アフロアメリカンバージョン」がリリースされるまでに生

放送、映画版やホームビデオ・DVD版、黒人と白人と各人種におけるバージョン、コメディとしてシットコム、そしてミュージカルといった形でネットワークの成功のみならず、ケーブルテレビにも成功をもたらした。だがあくまでも批評家たちはオリジナル版「ハネムーンズ」を賞賛して、最新版の必要性には疑問を呈した [Ron2005: 62]。

1950年代の「ハネムーンズ」の最大の功績は、ラルフ・クラムデンが熱心に見当違いな労働者個人の姿を戦後のアメリカの一都市のコメディに反映させて見せたことにあったのであろう^③。

おわりに

雑誌『ビレッジ・ボイス』誌上で批評家J・ホバーマンは「今日、都市のインテリは『ハネムーンズ』について貧困とミニマリストの美学で評価する傾向にある」と書いている [Ron2005:64]。

「ハネムーンズ」において描写された家族は、都市における労働者階級であり、その番組自身の「エンタテインメント性」はスターである俳優たちに依存するコメディの形式をとっていた [Nina1995: 7]。

「ハネムーンズ」はアメリカのテレビ番組において頻繁に観られたシットコムの1つではあるけれども、経済的に成功しようと帳尻を合わせようともがく労働者の姿は、1950年代の娯楽にありがちな楽観主義な気分の番組とは、ある意味で相反していたといえる。

1950年代のアメリカのテレビ番組の多くが日本に輸出され、日本でも人気を博したことは周知の事実である。だが、郊外に大きな家を構え、豊かな物資に囲まれ、平穏に暮らすアメリカの家族像とは、相容れない労働者階級として日常的に生活する「ハネムーンズ」のキャストたちの姿にアメリカ人の多くが心を奪われていたことも否定できない事実であると考えられる。

アメリカの大衆文化史についてテレビ番組を通じて考える場合に、番組の印

象のみならずキャストや社会背景を通じて内容を精査する必要がある。このことは、1950年代のみならず、現在のテレビ研究においてもあてはまることであるし、今後のテレビ研究においても不可欠なものであるだろう。

註

- (1) CBSによるとニュージャージー州のネットワーク局では「ハネムーンズ」の生中継において4種類のフィルム録画を所有できていたという。
- (2) ジャッキー・グリーンソンは、高い人気に支えられていたが、後に人気は落ちていった。NBCとは15年から20年の契約があり、放送に登場しなくても給与が支払われ続けたという [Poyntz 1961:72-73]。
- (3) 「ハネムーンズ」のファンは、「ハネムーンズの寿命と保存に関する気高い協会」(R. A. L. P. H) と呼ばれる自身の協会を結成していた。その命名はもちろん、ジャッキー・グリーンソンによって明るく演じられたラルフ・クラムデンの頭字語であったという [Ray 1993:114-115]。

参考文献

- Cheryl Pawlowski. 2000 *Glued to the tube; the threat of television addiction to today's family*. Naperville, Ill. ; Sourcebooks.
- Dana Heller. 1995 *Family plots; the de-Oedipalization of popular culture*. University of Pennsylvania Press.
- Ella Taylor. 1989 *Prime-time families; television culture in postwar America*. Berkeley: University of California Press.
- Lynn Spigel. 1992 *Make room for TV Television and the Family Ideal in Postwar America*. The University of Chicago Press.
- Mary Ann Watson. 2008 *Defining Visions Television and the American Experience in the 20th Century*. Blackwell Publishing.
- Nina C. Leibman. 1995 *Living room lectures: the fifties family in film and television*. Austin: University of Texas Press.
- Poyntz Tyler. 1961 *Television and radio*, The reference shelf volume 33 number 6, The H. W. Wilson company New York.
- Ray B. Browne and Ronald J. Ambrosetti. 1993 *Continuities in popular culture: the present*

1950年代アメリカのテレビに描かれた労働者

in the past & the in the present and future, Bowling Green State University Popular Press.

Robert Metz. 1975 *CBS Reflections in a Bloodshot Eye*, A PLAYBOY PRESS BOOK.

Ron Simon. 2005 *Ralph Kramden and The Honeymooners Turn the Big 50 (Sort of)* ,Television Quarterly volume xxxvi Number 1 : 59 – 68.

John C. Super. 2005 *The fifties in America*, Salem Press.

Tom Engelhardt. 1995 *The end of victory culture; cold war America and the disillusioning of a generation*, Basic Books.

吉原令子 2006 「女性運動」, 菊池重雄・佐藤成男（編著）『1960年代アメリカの群像』
大学教育出版 p.67 – 81.